

主な田端 文芸芸術家たち



あ行



芥川 龍之介(あくたがわ・りゅうのすけ) 明治25年(1892)～昭和2年(1927) 小説家
東京都中央区出身。大正3年、一家で田端435(現1-20)番地に新築転入。東京帝国大学時代、久米正雄、菊池寛、山本有三らと第三、四次『新思潮』を創刊。夏目漱石門下に加わり、『羅生門』『鼻』等を次々と発表、一躍文壇の寵児となる。たぐいまれな才気と下町人特有の世話好き性格は多くの人々をひきつけ、田端文芸芸術家村の中心的人物として大きな役割を果たす。昭和2年7月、『唯ぼんやりした不安』という言葉を通して自らの命を絶つ。

池上 信一(いけがみ・しんいち) 明治44年(1911)～昭和45年(1970) 小説家・教育者
山形県米沢市出身。昭和19年、田端338(現1-18)番地に転入したあと戦災に遭い、中野区、目黒区、台東区谷中を経て、昭和43年、再び同番地に新築転居。高校国語教員勤務の傍ら、大衆文学作家として活躍、雑誌『小説会議』の創刊同人となった。落語、乗馬、食べ歩きなどの多彩な趣味を生かした著作でも知られる。

池田 蕉園(いけだ・しょうえん) 明治19年(1886)～大正6年(1917) 日本画家
東京都千代田区出身。旧姓は榊原。明治44年、同じく日本画家の池田輝方と結婚。大正3年、田端479(現5-2)番地に新居を構え、夫婦で創作活動を展開する。水野年方、川合玉堂に師事。美人画を巧みとし、文展等で活躍するも31歳で永逝。

池田 輝方(いけだ・てるかた) 明治16年(1883)～大正10年(1921) 日本画家
東京都中央区出身。水野年方門下で師範代をつとめていた頃、新たに入門した蕉園を知り、波乱の顛末を経て明治44年結婚。大正3年、田端479(現5-2)番地の榊原邸内に新居を築き、日本画の普及に努める。



池田 勇八(いけだ・ゆうはち) 明治19年(1886)～昭和38年(1963) 彫刻家
香川県出身。明治43年、田端521(現5-5)番地にアトリエを建て転入。文展、帝展などで活躍。帝展審査員、ロサンゼルスおよびベルリンオリンピックの芸術部審査員などを歴任。題材を一貫して動物生態にもとめた造形表現を完成し、主に馬像を制作していたことから『馬の勇八』の異名をもつ。明治・大正・昭和天皇の御料馬像を制作。



石井 鶴三(いしい・つるぞう) 明治20年(1887)～昭和48年(1973) 彫刻家・洋画家
東京都台東区出身。日本画家・石井鼎湖(ていこ)の三男。大正5年、田端282(現1-10)番地に転入。大正11年、小杉放庵、倉田白羊らが創立の『春陽会』客員となる。昭和2年、放庵が発起の『老荘会』に参加。日本創作版画協会などにも関与。また、挿絵や相撲彫刻に新境地を開く。相撲協会横綱審議委員会初代委員。石井柏亭は長兄にあたる。



石井 柏亭(いしい・はくてい) 明治15年(1882)～昭和33年(1958) 洋画家
東京都台東区出身。日本画家・石井鼎湖(ていこ)の長男。大正6年、日暮里渡辺町筑波台1035番地に転入。10歳の時、日本美術協会に日本画を初出品。明治35年、太平洋画会会員になる。明治40年、山本鼎、森田恒友らと雑誌『方寸』を創刊。日本の洋画形成期に活躍。



板谷 波山(いたや・はざん) 明治5年(1872)～昭和38年(1963) 陶芸家
茨城県筑西市出身。石川工業学校で7年間教鞭をとったのち、明治36年、田端512(現3-24)番地に転入。1年3か月かけて田端に窯を築く。白磁、青磁、彩磁等に格調高い作品を遺した。帝国美術院賞受賞、文化勲章受章。独特な釉薬(うわぐすり)と彫文様とで近代陶芸界の先駆的指導者として活躍。



岩田 専太郎(いわた・せんたろう) 明治34年(1901)～昭和49年(1974) 挿絵画家
東京都台東区出身。大正15年、田端476(現5-2)番地、昭和6年、404(現1-23)番地に居住。吉川英治『鳴門秘帖』などに挿絵を描く。新聞、雑誌を舞台に、多彩なジャンルの第一線で挿絵画家として活躍。江戸浮世絵最後の美人画家とうたわれ、『専太郎ばり』の面風で知られた。長年の挿絵、表紙絵の功績により、昭和29年菊池寛賞、昭和36年紫綬褒章受章。



小穴 隆一(おあな・りゅういち) 明治27年(1894)～昭和41年(1966) 洋画家・俳人
長崎県出身。大正8年、田端380(現1-27)番地の下宿『新昌閣』に寄宿(推定)。開成中学中退後、太平洋画会研究所で中村不折に師事。二科会・春陽会などで作品を発表した。大正8年(1919)に芥川龍之介と知り合って以来、書画や俳句などを通じて親交を結んだ。芥川が子供たちにあてた遺書に「小穴隆一を父と思へ……」とあり、その信頼の深さがうかがえる。俳号・一亭(いちゆうてい)。

太田 水穂(おおた・みずほ) 明治9年(1876)～昭和30年(1955) 歌人・国文学者
長野県出身。大正8年、田端283(現1-12)番地に転入。田端の太田をもじって『二田荘』と称す。同郷の歌人・西賀光子と結婚。明治35年第一歌集『つゆ草』、明治38年第二歌集『山上湖上』(歌人・島木赤彦と合著)を刊行。大正4年には同人誌『潮音』を創刊した。

大塚 秀之丞(おおつか・ひでのじょう) 明治3年(1870)～昭和12年(1937) 彫刻家
山口県出身。九谷焼製陶業者より招聘され、石川県で九谷焼の技術指導を行う。明治27年、富山県工芸学校(現高岡工芸高校)金工科教諭として赴任、24年間に職し多くの逸材を育成。大正6年～昭和11年まで田端327(現2-7)番地に居住。秀之丞の長女エツは、彫刻家・国方林三と結婚。



岡倉 天心(おかくら・てんしん) 文久2年(1862)～大正2年(1913) 思想家・美術評論家
神奈川県横浜市出身。大正2年、田端147(現3-15)番地に仮寓。明治22年の東京美術学校(現東京芸術大学)開校と同時に幹事となり、翌年校長に就任。明治31年、非職命令をうけ辞職、日本美術院を創設。米國ボストン美術館顧問、文展審査員などを歴任。日本美術を世界に紹介した明治美術界の先覚者。

小川 三知(おがわ・さんち) 慶応3年(1867)～昭和3年(1928) ステンドグラス作家
静岡県出身。大正元年、東京美術学校の同窓生だった板谷波山の紹介で田端490(現2-11)番地に土地を借り、翌年工房と自宅を建設。没するまで暮らした。東京美術学校で日本画を学んだ後、アメリカでステンドグラス技術を修得し、帰国後、西洋建築だけでなく日本家屋にも調和するステンドグラス作品を日本各地に残した。



押川 春浪(おしかわ・しゅんろう) 明治9年(1876)～大正3年(1914) 冒険小説家
愛媛県松山市出身。大正3年、田端494(現5-3)番地に転入するも、数か月後に没する。東京専門学校(現・早稲田大学)在学中に『海島冒険奇譚・海底軍艦』を発表。当時の科学思想を盛った空想冒険小説家として名をあげ、SF小説の先駆となる。小杉放庵らと雑誌『武俠世界』を創刊。

尾山 篤二郎(おやま・とくじろう) 明治22年(1889)～昭和38年(1963) 歌人・国文学者
石川県金沢市出身。大正10年、田端478(現5-2)番地に転入。在郷時代、室生厚星・田辺孝次らと交友。また自らも同人誌『芸林』を主宰。古典、殊に西行の影響を受け、『万葉集』や西行等の研究で文学博士となる。